

ベトナム経済の光と影（後編：その影）

日本銀行国際局参事役
ベトナム国家銀行・JICA チーフアドバイザー 鉢村 健

はじめに

日越には双方の国民が意識していない文化があります。香道もその1つです。例えば、日本人に馴染みの深い「伽羅」はベトナムが原産地であることをご存知でしょうか。織田信長の蛮行で有名な正倉院の蘭奢待（黄熟香）も伽羅です。日本人が築き上げた「香道」は、六種類の香木の中でもベトナム伽羅を最上級のものとして扱います。奈良時代から江戸時代（特に文化文政期）は、日本社会の奥深くまで伽羅の持つ文化的価値観が浸透していました。

さて今回のテーマはベトナム経済の影です。日本では報道されないビジネスの最前線では何が起きているのか。ベトナム社会や企業は何を苦勞しているのか、解説して行きましょう。

日本企業が直面するドル調達の問題

第一はドルの調達問題です。ベトナムにいる日本企業の大半は外為の問題を抱えています。噛み砕いて言いますと、現地で儲けた現地通貨をドルに交換して日本に送金することや海外との貿易決済の為にドルを調達することが、簡単には出来ない状態が続いて困っています。

何故このような事態が発生するのでしょうか。ベトナムはドルが不足しているのでしょうか。答えは、全くの逆です。近年の高成長を背景に民間（正確には非金融部門）には山ほどドルがあるのです。つまりドルがあっても外国

企業には流れ難い構造になってしまっています。ベトナム国内にはドル紙幣が大量に流通しています。金融統計では銀行部門の資産として2割がドルであることを公表していますが、国内のドル流通量は約4割とされています。

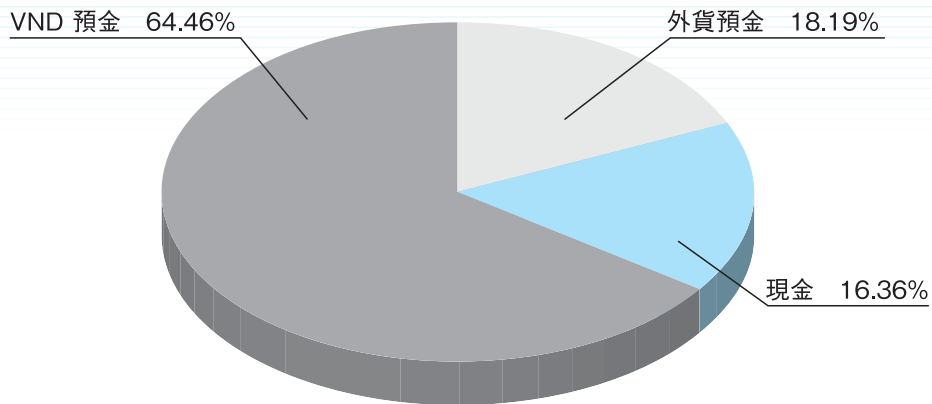
ベトナム国内に大量にドルがあってもそれを必要としている企業が買えない理由は何でしょうか。分かり易く申し上げれば「誰もがドルを持ち続けたい」から、誰も手放さないのです。それでは市場に委ねて高値のドルを買えば良いではないか、或いは為替の先物予約をすれば良いではないかと思うことでしょう。しかしベトナムの外為市場は機能不全の状態。また中央銀行もドルを供給する原資に欠けています。従って金融面の改革が急務なのです。

忍び寄るインフレ

第二はインフレ問題です。ベトナム政府は消費者物価指数を公表していますが、統計の精度はかなり低いです。一般論ですが、途上国の経済指標を先進国と同等に取扱うとマクロ経済見通しを誤ります。それは優劣ではなくて、そもそも対象データが存在しない場合や調査から分析するまで長い時間を要する場合など様々な制約があります。そうした前提を踏まえつつ、ベトナムのインフレを見極める必要があります。その結論はかなり深刻な状態です。

インフレと中央銀行の通貨供給量は密接不可分な関係があります。消費者物価指数の精

ベトナム金融機関の現預金構成比率



(出典)2009年、ベトナム国家銀行

度が低くても、通貨供給量の伸びが経済成長率を大きく上回る状態は危険なサインと考えるべきです。ただ途上国ではそれだけでインフレと見るのも早計です。インフレが本格化することを事前に察知するには様々な経路を検証しておくべきでしょう。

- ①基礎的な生活物資の価格引き上げが急激で大き過ぎると、国民のインフレ期待が一気に高まることになります。具体的にはベトナム人の主食となる米価格や、電気・ガス・水道の料金等の値上げは要注意です。
- ②途上国ではこれらの動きに連動して労働者は生活防衛の観点から賃上げ要求を行います。労使交渉が整わないとストライキに結びつく可能性も出て来ます。
- ③ベトナムのように外国資本が途上国の経済成長をリードする場合には国内の給与格差が生じやすい傾向があります。その為に公務員の給与改革が進んで、国内の賃上げに大きな影響を与えていきます。

現在のベトナムでは、①の領域で大きな動きが見られます。足元の電気代が約15%引き上げられた他、ガソリン価格も約10%値上りしています。それを受けるかのように②の賃上げ交渉が厳しさを増しています。ハノイや

ホーチミンの工業団地ではこうした動きが広がる可能性があります。③ベトナム政府は公務員給与改革を重視していますので、今春にも最低賃金の引き上げが実施されます。これらのおり政府には慎重な対応が求められます。

ところで、インフレ懸念の問題も外国為替の問題も根は同じです。すなわち、自国通貨であるドン内外価値が安定していないことに根本原因があるのです。

高度経済成長を上回るようなインフレの進行、15年間も続いている一方的なドン安の構造。これらの発生原因とは、ベトナム政府・中銀の通貨政策が誤ってきたことを裏付けています。ちょっと厳しい物言いになりますが、彼らは高度経済成長に酔いしれる中で自国通貨の問題を軽視過ぎたのです。

ベトナムには3つの通貨があると言われていています。ドン・ドル・金です。ベトナム人は自国通貨であるドン札を信用していません。答えは非常に明快です。前述の通り通貨価値が日々低下するからです。こうした事態を受けて、ベトナム人は自己資産を保全する為にもドルを買い、一定量になると現物の金に交換して自宅に保管するのです。この行為が続く限りはベトナム国内の貯蓄が銀行を通じて、

自国の産業振興や企業育成に向かうことはな
いです。

ベトナムの将来像

第三は現下の日越関係を踏まえベトナムの
将来像をどう考えるか。本レポートの前編で
はベトナムの「光」と称して潜在能力と成長
性の高さを指摘しました。後編ではベトナム
経済が通貨問題を背景に悪循環に陥っている
ことを説明しました。「光と影」を勘案する
とベトナムは今後どのような道筋を歩んでい
くのでしょうか。

ここから先の記述は、ベトナムの調査や分
析ではありません。将来像を描くには、個人
的な印象論が含まざるを得ないと考えていま
す。

私の考える日越関係とは、過去数十年間の
経済関係だけではありません。日越の文化的
な歴史が物語っているように、両国の関係は
非常に特殊なものです。またベトナムから見
ても日本は世界第1位のODA供与国であり、
最も信頼を寄せる国家です。おそらく最近の
マクロ経済情勢の悪化を踏まえて、各国から
の民間投資は減少する可能性が高いでしょう。
そうした中で日越関係は他国とは異なり、よ
り一層強固なものになることが予想されます。

仮にそうならないとした場合には、日本の
将来の国際的な信認は低下することでしょう。
何故ならベトナム以上に、他国も日越関係の
将来をそのように見ているからです。近年の
日本は国際的な自信を失い、自ら打って出る
ような気概もなくなってしまいました。閉塞
状態の中で、日越関係すらきちんと出来ない
ようではどこの国との関係も上手く行かない。
将来の日本の生き筋を占う上で、日越関係は
試金石のような位置付けになりつつあります。

日越関係のゴール

最後にご紹介したいエピソードがあります。
ベトナムには設立52年の歴史を誇る国立交響
楽団があります。その首席指揮者兼音楽監督
は本名徹次さんと言う日本人が務めています。
彼は当地で約10年間暮らし、ベトナム人の交
響楽団を国際水準に引き上げる指導を続けて
います。給与や待遇はベトナムの公務員と全
く同じ。対価を求めないその姿勢に心打たれ
たベトナム人が集い、いま彼らは一流の技術
を身に付けつつ、真の友情で結ばれています。

日越関係とは短期的な損得勘定で動くもの
ではなく長期的な信頼関係を基礎に築き上げ
るもの、そう思います。その先に日本の未来
も広がるのではないかと信じています。



〈筆者紹介〉

鉢村 健 氏

1959年埼玉県（旧浦和市）生まれ。1982年立教
大学経済学部卒業。1995年日本銀行人事局調査
役。2001年発券局総務課長。2005年福島支店長。
2008年国際局参事役ベトナム国家銀行・JICA
チーフアドバイザー。著書：『がんばっぺ！福
島県（日銀支店長の経済教室）』福島民友新聞
社。『Outlook for the Financial Markets of
Hong Kong』BOJ Special Paper No.218。
『香港金融市場の現状評価と97年問題』日本経済
研究センター金融講座657号。